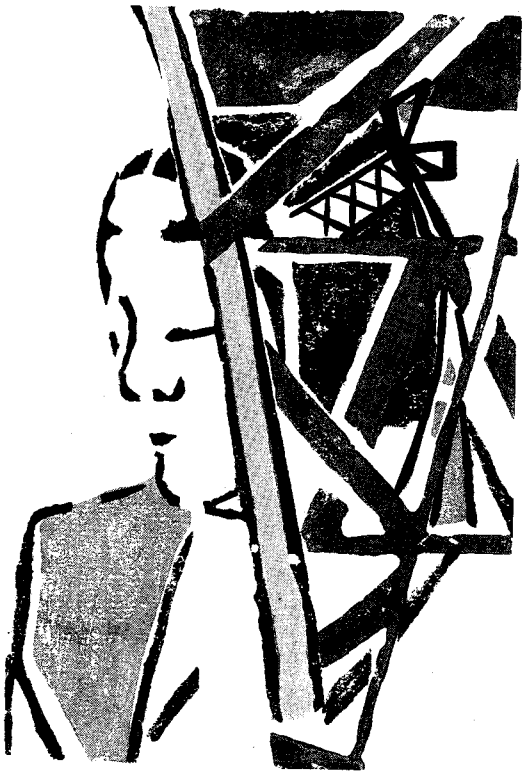
うとう

協和うとう会四十周年記念誌

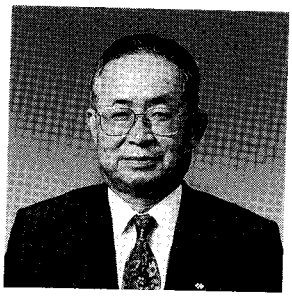
うとう



協和うとう会　四十周年記念誌

表紙　題字・加藤　辨三郎氏（元協和発酵会長・故人）
　　版画・高橋　孝夫氏（協和うとう会会員・富士）

うとう会四十周年を祝して……中村　寛之助　2
私の謡曲と協和発酵……新井　純　3
謡と健康と地域貢献と……高橋　孝夫　4
私と謡曲……磯部　武夫　5
謡についての私の課題……富岡　啓太郎　6
謡曲、仕舞そして囃子……西村　淳　9
水原一瓢さんを偲ぶ
　遥かなる水原さんを思う……岡田　英明　7
　熱心でない弟子を相手に……高山　健一郎　8
第40回記念大会特集　うとう会40年と“私の謡曲”……12
謡曲十五徳……20
協和うとう会のあゆみ　第31回から十年の足跡……30
協和うとう会　第1回～第40回の開催記録……51
わが謡曲部稽古風景　土浦工場謡曲部……11
　富士工場謡曲部……22
　宇部工場謡曲部……24
　本社謡曲部……26
　堺工場謡曲部……36
　四日市工場謡曲部……44
　大阪支社謡曲部……50
協和うとう会　会員名簿……52
編集を終えて……安嶋　将　72



うとう会四十周年を祝して

中村 寛之助

うとう会は、発足後四十年を迎えました。まことにおめでとうございます。

何といっても謡の同好会を四十年も続けてこれたことは立派なことです。これは会員の皆様の熱意と幹事の方々のご努力の賜物です。心からお祝い申し上げます。

うとう会の名簿や、記念誌を拝見しますと会員の中には既に亡くなった方や現在、病いの床についておられる方も見受けられます。

会員は全事業場にわたり、またご家族の方も沢山いらっしゃいます。家族の方は各事業場で、社員と一緒になって謡の稽古を続けてこられました。謡を通して同好の志がつながり相互の交流が深まりました。うとう会は、協和の中に趣味で結ばれた新しい人の輪を作りました。

私自身の体験ですが、最近、うとう会の友人の家に招かれた時のことです。

友人は「あなたと一緒に謡をうたったテープがある。一緒にテープを聞きませんか。」と言われました。二十数年前に友人がシテをやり、私がワキを謡った時のテープでした。当時の懐かしい想い出がよみがえり感動しました。

うとう会の会員の中には謡だけでなく、仕舞を立派に舞われる方や、笛や太鼓・小鼓をよく演じられる方もいらっしゃいます。また、先輩の中にはプロ並みの実力を持ち、能を何曲も舞われた方もおられました。

私はうとう会で、謡曲について何曲かの出演を通じていろいろなことを勉強させていただきました。

私は協和に入社してから宝生流の謡を始め、最近まで続けてきましたが、現在は、足の具合が悪く、謡は中断しています。しかしこれからは舞台で謡や仕舞いは出来なくても、専ら能楽堂に通って、能を鑑賞しようと思っています。何といっても、能は日本の代表的な古典芸術です。

今まで謡を続けてきたお陰で、能についての知識は多少は持つことができました。能が醸し出す世界を、一般の人よりはよく理解し、堪能することができると思っています。

能を通して、日本の古典芸術を勉強したいと思っている昨今です。

うとう会の今後のご発展と会員の皆様のご精進をお祈りいたします。

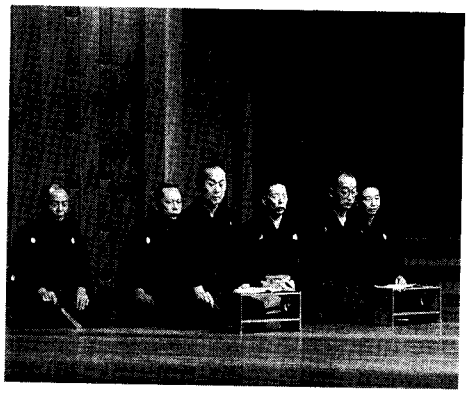
（平成十四年三月）

《協和発酵工業㈱ 相談役》

私の謡曲と協和発酵

新井　純

後輩のために長年の謡曲の思い入れをタップリと記せ、とのご指示なので私には語り尽くせぬ思い出が次から次へと湧いてくるのですが、記憶があいまいなところもあります。学士会午餐会に東京へ転勤して以来入会しているのですが、昨年十二月に米寿の祝いに杖をいただきました。幸か不幸か、床の間の隅に置いたままになっています。私の半生は協和発酵そのものですので、自分史のつもりで書かせていただきます。



左から三人目が新井さん

絶対に謡なんか…

旧制中学の時、父は日本紡績に勤めていて、社宅にいました。二階八畳間と六畳間の二間の六畳が私の部屋でした。八畳で父が謡うのが私の勉強の邪魔になり、といって父に文句もいえません。私は野球が好きで、先生から野球部へ入れといわれ、自分もその気になっていたのですが、母の猛反対で入部はしませんでした。しかし、大人になっても絶対に謡なんかやるもんか、と思っていたのです。

ところが、昭和十二年に京都大学を卒業して、山口県三田尻の福島人絹に入っのが一つの転機となったようです。父から「綿紡はもうだめ、これからは人絹が伸びる」と聞かされ、父の京大機械の同級生が私の恩師だったこともあり、あまりにも遠く寝台車で行かねばならない未知の山口県へ、気が進まないままに着任しました。三田尻に着いて驚きました。京大工業化学出身者が十人もいるのに、機械出身は私だけでした。千人近い女工さんが人絹を造っており、場内の広場にスフ工場を建てようと設計準備中だったので、その計画室に入れられたのです。「人絹工場へ入るとは物好きネ」と京大機械の仲間から言われたのはしばしばでした。

ところが、ここに驚きがありました。謡曲部があったのです。東京から師範を招いて稽古していいたのです。私は父が宝生流なので宝生の先生を探しましたが見当たらないため、やむを得ず観世流の素人の先生を探して、無理にお願いしました。この方はお役人でしたが、とても熱心で転勤の先々で謡曲部を作り三田尻で退官し、悠々自適の生活でした。そこへ友人と二人で毎週一回通いました。中学時代あんなにイヤだったのが百八十度の転換、これは何でしょう！

協和発酵の前身

福島人絹に五年、戦争のためとはいえ東洋紡績と合併して一ヵ月にならない昭和17年7月、台風で十万坪の工場が使えなくなったのです。加藤辨三郎博士がこの廃虚を転換され、東洋紡績他数社とで東亜化学興業を発足させたこと、せっかくイソオクタン工場ができたのに軍の命令で無水アルコールに切り替えて沖縄戦に送ったことは協和発酵社史などでご存知の人も多いでしょう。

その間も、謡は続けていました。課長の私が、謡では部長だと笑っていたものです。仕舞は薙刀まで、囃子は大鼓の中の舞までで挫折しました。熱心さがなかったのですネ。同部同課の希望者？を集めて時々、会を開いては何十人かになりました。上司には、これが面白くない方もおられたようですが…。

高校体育館に能舞台

昭和三十三年十月、防府商業高校の体育館に組舞台をおき、見所には工場のパレットを何百枚か敷き並べ、観世流先代家元・元正師ら錚々たる師匠さんを招き能三番を催した時は、信用金庫理事長と村田外科病院長と私の三人が幹事を務めました。今は亡き津田康由師に来防をお願いして満十周年でした。ちょうど私が工場長だったので、無理ができたのでしょう。しかし、その後にロータリークラブの会合のため妻同伴で岡山に行き、その三日目、疲労困ぱいで意識を失ってしまう有様でした。三十四年元旦に向けて、有隣館での年頭の辞を書き終わった時、本社への転勤を命じられました。赴任のため三田尻駅を発つ時、「こんなに沢山の見送りは見たことがない」と直属の部下だった人に言われ、うれしく思いました。

本社製造部長―大協和石油化学―協和油化―日本合成アルコールと脇道ばかりをとぼとぼと歩いて来て、昭和六十年にお暇をいただいてから二十年近く経ちました。

学士会の観世流の「村雨会」に入って二十年になるでしょうか。宝生流は長年休部中のようです。やはり世話役がしっかりしていないとそうなんでしょう。「村雨会」は月一回（第四土曜日）に、謡三番、師範にお願いしています。正月は「神歌」と三曲、先日は「玄象」「海士」「盛久」で十六人の少数でしたが、会員は三十五人です。

（平成十四年二月記）

《協和うとう会会長》

謡と健康と地域貢献と

〝謡の高橋〟で市の文化事業にも

高橋　孝夫

謡の効用について書けとの注文ですが、先ずもって健康を挙げなくてはなりません。

私は満二歳の時、ハシカの余病で小児麻痺になり、左下肢が発育不全となりました。そのため左足に力が入らず、駈けることは出来ません。言わば、右足一本で八十年を過ごしたことになります。

七十歳くらいまでは、歩くことも意に介しませんでしたが、老境に入るに従って、歩くのがだんだん困難になり、今ではステッキが必要となりました。歩くのは全身運動で健康のためには、無理のないよい方法とは承知していますが、それも難しくなってきました。それなのに大病もせず、今日まで頑張って来られたのは謡のお陰だと思います。

よい姿勢で、腹式呼吸により腹から大きな声を出すことが、私の健康を支えてくれているのだと思います。少々、長目の文句でも、息の続く限

り謡う、吸気は一瞬に出来ますが、吐く息は意志をもって全部出すようにしています。

効用、その二は謡のお陰で顔が広くなりました。

六十五歳で地域人となり、自治会の役員として二年間、その後、長寿会の役員として今も地域のために尽くしていますが、折あるごとに、謡曲の宣伝をしてきました。

また、地元の謡曲会役員もおおせつかり、市の文化事業にも貢献しています。謡の高橋としてだんだんに知られ、初めての交渉事にも、相手は私のことをよく知っており、難なく交渉がまとまることも再々です。

これも謡の徳でしょうか。

私と謡曲

磯部　武夫

第40回協和うとう会で一回目からの出席者は高橋・西村・富岡の皆さんと私の四人でした。第20回、第30回と同様に第40回の記念誌を出すことになり、その席上でもさっそく取材が始まりました。しばらくして原稿依頼の用紙がドサッと送られてきました。思い出は一杯あります。さて、書き出そうと思うと断片的で、まとまった文章になりません。考えたのが平成六年に私の長い謡歴を「私と謡曲」という題で門外不出の一冊の本にまとめました。その「序」に「趣味としての謡は、私から切り離せないものです。謡から多くの友人知人ができ、ロマンスもありました。大西信久先生に昭和21年から習い始めて以来、平成六年で四十八年になります。

小鼓も二十年を超えました。若い頃は上手になりたい一心で、途中少しは天狗にもなりました。怖いが良い先輩を持ち何度も鼻を折られました。そのたびに何かと勉強させられました。その先輩から『天狗になれ、自分が一番だと思うと他人より大きな声で謡いたくなる。そのためには稽古を熱心にする。謡は稽古が第一なんだ、ただ天狗の鼻を折られた時すなおに初心に返れ』と教えられました。私は素人であることを誇りに、玄人の真似をせず、素人の品を大切に稽古していきます」と書いてあります。

素人でもノリの外した謡ではよくないと思い、先生にご紹介を得て、小鼓を習ったのです。能は歌謡劇です。歌にはノリ（テンポ・リズム）が必要です。能（謡）にも能のリズム（謡のリズム）があるのです。昭和二十二年に協和産業に入社して先生の本稽古場へ移りました。ここでは幹事長さんや古い先輩、同年先輩の人、若いお嬢さんも大勢おられました。その中に小鼓大倉流家元の故大倉長十郎師の妹さんの鈴子さんもおられました。昭和六十二年（四十年後）「長十郎追善能」へ行ったとき、廊下で「磯部さんですね」と声をかけられましたが、誰かなと思っていたら「鈴子です」といわれ、「ああそうだな」と思い出しました。私を四十年後にも覚えておられたかとうれしくなりました。観世流太鼓家元の観世元信師の奥さんです。大阪は観世流

の太鼓とは縁が浅いので観世流太鼓の出演はほとんどありません。

大西先生は厳しい怖い先生でしたが、いろいろ気を配っていただきました。私の結婚式の日にその式場へ先生の奥さんが「望月」の免状をお祝いとして持参されました。また、初めての転勤（昭和33年本社人事）の時、大阪駅へ奥さんが来られ「先生が京都駅で待っておられる」といわれ、京都駅で窓越しに「元気でな」と見送っていただきました。

私の自慢は、正式の舞台（三田住吉神社）の奉能の舞台で「翁」の小鼓の後見をさせてもらったことです。素人では数少ないと思います。

協和うとう会の思い出も多くあります。長い歴史のあるこの会が何時までも残るためには後継者が必要です。若い同好社員を何とか皆さんの努力で獲得していただきたいのです。だんだん謡をする若い人が少なくなってきました。若い社員に謡を勧めることは、現役の人にしか出来ないでしょう。強く強くお願いします。

謡についての私の課題

富岡 啓太郎

謡を始めてかれこれ五十年になる。紫雲先生の著書ではないが“謡五十年”というところである。よくもこんなに続いたものだと思うが、それというのも協和発酵に入社して良き友と環境に恵まれた（社内に同好の士が多い）ことによるものである。昭和26年入社以来、浮き沈みはあったもののずっと続いているのだから……。お陰で最近は謡によって閑居を慰め鬱気を散ずる毎日である。とはいえ、ただ漫然と声を張り上げているわけではなく、どうすればうまい謡が謡えるか模索の努力は続けているつもりである。

息の出し引き

昨年水原六瓢舞台での第40回うとう会の際、大森大陸さんから面白い話を聞いた。それは中国には「有気音」と「無気音」というものがあるそうだ。「有気音」というのは一枚の紙を口の前において声を出した時、当然この紙はなびくであろうが、その時の音をいい、「無気音」というのはこの紙がなびかないような音をいうのだそうである。これをわが謡曲に当てはめると、息を出して発声した声と、息を引いて発した声に該当するのではないかと思われる。謡曲では特に息を引いた声（これを“引声”ともいうのではないか）が大切であって、これを適宜に織り交ぜることによって謡が俄然引き締まってくるのである。息を引いてとは良くプロが使うテクニカルタームであるが、これを文字通りに解釈して息を吸いながら声を出したら、大鼓の「ヨーイ」の掛け声になってしまい、あるいはまたヨーデルの裏声のようになってしまうであろう。息を引いた声というのは出す息をセーブして発した声をいうのである。こうすることによって、外に出す声の割合を小さくして内に込めてしまう声の割合を大きくするということで、決して声量を小さくすることではない。謡曲とは息を出すことによってそ

れに伴って声が出てくるのであって、息の出し引きによって感情の移入を図っているのである。曲や役柄の位、情景の描写その他表現するのに、一曲を通してこの息のコントロールが重要なファクターとなっているのである。実に息の出し引きによって声柄の変化、情緒の転換が実現できるのである。声量豊かな人の欠点であるが、どこもかしこも何の抵抗もなく全部出してしまったら、声が散ってしまって雑に聞こえ、締まりのない謡曲になってしまう。

こらえた発声法で

曲にもよるが、もう少しこらえながら発声する、つらくなって発声する、外に声となって出てくる前にスーッと出るのでなくて、あちこちにぶつかって初めて出てくるといった感じの発声法が私に求められるところである。声に任せて謡ったら荘厳な感じを出すべきところが台無しになってしまう。こらえることにより内に力がこもってくるのである。

私の謡は外に出たものが少し荒い——色紙をちぎってペタペタ張ったようだといわれる。山下清の絵は大変緻密だが、あれの荒いもののような感じだといわれる。もっときれいな線で描いていきたいものである。

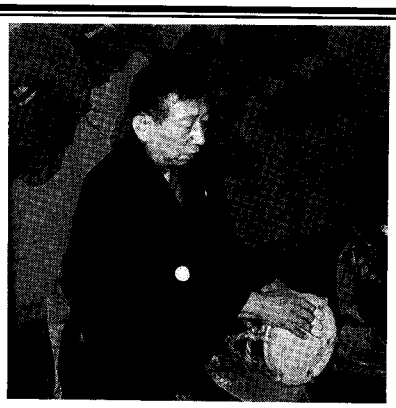
曲に応じた発声——これは文意に沿った気持ちの持ち方に影響されるが、たとえばハルはメル、メルはハルとか、ハリながらコメたものもあるとか、そういう逆の手法も身についたらなあと思っている。

良く鍛えられた声を徹頭徹尾息の力で駆使する、常に充実した息の力で扱い抜く、それが謡の特徴である。それゆえ謡は声で謡おうとするよりも、むしろ息で謡う心構えが必要である。息の扱い方は単に声のみでなく、気合や位、メリハリ緩急などにも深い関

水原一瓢さんを偲ぶ

遥かなる水原さんを思う

岡田　英明



神谷町にあった稽古場で、水原さんから謡を習い始めたときに、いきなり地拍子から稽古が始まりました。野村蘭作先生（水原さんの先生で後には私の先生でもあった）は、囃子謡が本当の謡だ、というお考えで地謡は拍子謡で教えておられたことから、水原さんもそうなさったのでした。水原さんが野沢の社宅から大和市へ移った頃の家は、まだ能舞台を造られる以前の家で、米軍の人が住んでおられた家を買われたもので、真ん中に大きな居間がありました。水原さんが野沢の社宅から大和市へ移った頃の家は、まだ能舞台を造られる以前の家で、米軍の人が住んでおられた家を買われたもので、真ん中に大きな居間がありました。そこが水原さんの謡会をする場所になっていました。当時は、協和以外に東京電力の社員や、茶道具屋の主人、茶道の先の人など、実に様々な職業の人が来ていて、謡の会はとても華やいだ今までで一番楽しい会でした。

登山が好きで、丹沢で怪我をされてからは、大きな山へは登られることがなくなりましたが、丹沢渓谷でキャンプをしたことは、今でも思い出します。水原さんは、私を登山の好きな仲間としても接してくれて、二人でよく山の話しをしていました。

係を持っている。息を納めてとか息を引いてというのは、この息扱いのコツをいうのである。謡の技術における最後の問題は、息の扱い方一つに帰するといっても過言ではない。

謡曲について私の抱いている課題は沢山あるが、いずれにも関わってくるのがこの息扱いのやり方である。

間の表現

謡の面白さはリズムの運用にある。地拍子の上では拍は等間隔でも実際の謡は決して等間隔の拍には謡わない。いろいろ拍の伸び縮みがあるのである。それによってリズムの変化が出てきて面白いのである。このことは囃子における鼓の粒についても同様である。

間は概念的にいえばタイムであるけれども、芸の実際においては気合である。謡の間を時間的に解釈してタイムを測っても芸の真実をとらえ得る手段とはならない。そこで節を謡おうとする前に間を謡おうとする気持ち、気合を捉えようとする気持ちが大切であろう。

この間を活かすためには何よりも文意を謡うという気持ちが大切であり、仮名を拾って謡うのでなく仮名の伸び縮みとそのハコビ、一句あるいは数句の緩急、そして息継ぎも大いに関わってくるのである。仮名に伸び縮みをつけて謡ったならば、節の余韻と仮名の響きとの諧調によって非常に韻律的な味わいを深めることができる。

間も謡の一部であり、間の表現が重要である。

文意の把握

文意を解釈して曲目の人物とか作意とか、あるいは構想曲趣を知る。そうすれば謡い方も自然身について、謡に退屈しなくなる。謡に退屈する人の多くは謡の技術の他に文学的価値ないし戯曲的な意味

水原一瓢さんを偲ぶ

高山 健一郎

熱心でない 弟子を相手に

水原さんとは昭和32年以来のお付合いで、様々ことが思い出されますが、そのほとんどは謡にまつわるものです。

誘われて謡曲を始めたのが昭和40年で、その年の第5回うとう会が初舞台でした。東研謡曲部がうとう会へデビューしたのもこの年です。東研謡曲部は水原さんの本社転勤とともに一時途絶えましたが、昭和45年から月に数回来ていただいて再開、平成の初めまで延々、細々と続きました。熱心でない弟子を相手によく続いたものです。指導は非常に非常に厳しいものでした。うとう会に参加した東研の水原一門は三十人余り、本社の方も加えると五十人以上になるでしょう。

水原さんは不惑の頃からか「俺は謡い一本に絞った」と言っておられました。うとう会二十周年記念誌に「協和うとう会——20年の足跡」と題してまとめられています。几帳面な性格と謡曲に対する情熱が滲み出ています。

三十周年記念誌には、「小屋主奮戦記」と題して、農学部出が能楽師になって舞台を造った自叙伝的物語をユーモアを込めて綴っておられます。再度読み直し改めて水原さんを偲びました。

を知ろうとしない。ただ漫然と節や調子のみに没頭していると何を謡っても同じようにしか謡えない。それを克服するにはまず謡本を熟読して、謡曲そのものの内容を知ることである。

「牛飼いさんよ、車を寄せなさい」と言うべきところを「牛飼車を寄せなさい」と誤って謡ってしまうのは、息継ぎの場所を誤る場合もあるが、多くは文意を生かした謡い方を心掛けていないことによるものである。

宝生流の名人・近藤乾三先生は息使いの大変上手な先生であったようであるが、このことに関連して「情声に発すと言うじゃないか」とシャレを言われたと、わが師・野村四郎先生から聞いたことがある。「経正のこの場面の意味合いは多少違うかもしれないが、これをそっくり富岡さんに差し上げる」と四郎先生が言われるので、以来私の指針として、気持ちを声に発するように心掛けている。

節に重点を置きすぎずに文章の方にもっと心を寄せて、枝葉ばかりでなく一本の幹(芯)が存在するような謡を心掛けたい。

結び

「桃・栗三年、柿八年、柚子の大馬鹿十八年」と言い、謡には「仕舞三年、謡十年」という言葉があるが、一応人様の前で舞ったり謡ったりするのには、それくらいの習練が望ましいということであろう。それに引き換え私は謡五十年になるというのに、まだとても覚束ない有様である。

「息の出し引き」「間の表現」「文意の把握」この三つを克服し得たら、私の謡も少しは聞けるようになるのではないだろうか。もっとも一生かかっても克服など大それたことは成し得ようはずもなく、一生追い続けることになるだろう。

謡は確かに難しい。それゆえにまた面白い。これからもうとう会の仲間とともに楽しみながら、絶えず向上していきたいものである。

謡曲、仕舞そして囃子

西村　淳

謡をやらないか、と誘われたのが昭和23年東京大学追分寮にいた時だからもう五十五年になる。多忙のため中断していた時期もあったし不熱心な時ももちろんあったが、多くの優れた師、良き友に恵まれてここまでこれたことに深い想いと共に感謝の念を禁じ得ない。

富岡さんと共に師事

最初に玄人の先生に就いたのは昭和26年、富士工場時代に富岡さんと共に師事した矢来系統の田所利朗先生であった。ここで初め仕舞を教わった。翌27年新装なったストマイプラント稼働のため防府工場へ転勤。素謡は工場幹部でもあった新井純様に謡曲部の皆さんと共にお習いしたが、その他に宗家系統の職分津田康由師に謡と仕舞、地元謡曲界の幹部である町田様に地拍子を、山口市から来防される太鼓葛野流職分片山弥喜知師に小鼓（幸流）の手ほどきを受けた。何れも富岡さんと同行であったが、囃子は新井・富岡のお二人は大鼓の稽古を受けておられた。この五年半の防府時代は趣味の基礎を作り幅を広げることが出来た得難い機会であった。

そのあとさらに富士—防府—本社と転勤を重ねるが、仕事が多忙であったため謡曲については特筆すべきことはない。結局、過労のため脊椎

カリエスに罹患、一年間入院、休職の後再び謡曲の道に目覚めることとなる。

健康取戻し謡曲再び

昭和51年頃、本社謡曲部は指導者の磯部さんが大阪へ転勤された後、総務部の仕事の関係先から宗家系統坂井師門下の女流師範・小野葉満子先生を招いて稽古を続けていた中に入部、その後四街道にも招いて観葉会を結成（先年解散）、また同じ頃町全体の同好会である四街道観謡会を立ち上げた。前者については数年間幹事としてお世話をしたが続くべき縁もなかったようで、新たなる師を求めて初代梅若

万三郎師（能楽界最初の文化勲章受賞者）の高弟であった職分鈴木一男師およびその門下の西山幸助先生に師事する縁に恵まれた。先生は謡曲のリズム、即ち囃子謡を重視しておられ啓発された面は限りなく大きい。そのご指導により昭和57年名誉師範の稱号を許され、自らも仕事の休日を利用して小さなお稽古の会（淡謡会）を持つに至り、現在もなお中高年の皆様方と和気藹々として楽しんでいる。このような雰囲気では関心が囃子の勉強に向わざるを得ず、鈴木先生のご紹介により太鼓を葛野流宗家預り瀬尾乃武先生（人間国宝）にお習いしたが先生のご高齢により中断、引続いて先行しておられた富岡さんの後を追って一噌流能管の高峰一噌幸政師に六十二歳の時入門。かなり熱心に稽古をしたお蔭でドンドン進み、三年後の大会では大曲「望月」（鞨鼓と獅子）の居囃子を無事吹き納めることが出来た。C型肝炎による先生のご不調もあり八年間で稽古を中止したが、最後の大会で舞囃子「三輪・白式」を人間国宝観世銕之丞師の舞により吹き納めることが出来たのは、翌年師の逝去のことも重なって、当時七十一歳の小生にとって忘れ得ぬ想い出となった。

太鼓の撥捌き磨く

六十五歳の時一噌先生のご紹介で太鼓を勉強すべく金春流太鼓職分三島元太郎師に入門、今までに九年間を経て、舞物はすべて習い終え、いよいよこれから難しいものが待っている状態である。太鼓の難しいのは掛声と撥捌きであり師伝によっても一朝一夕にはなかなか会得し難い。「幸い」は歳の割には覚えが早いとおだてられていることであり、素直にそれを信じている。

今まで記述した師の大部分は故人となられ、ご存命の方も既にかなりのご高齢なり不調の身となられた。ただ一人太鼓の師のみは能楽界の太鼓代表ともいうべき東奔西走のご活躍ぶりなのでしばらくはお稽古を続けることになろう。

囃子は謡を栄やす――すなわちより高度に、賑やかにするものであるが、謡の方も一定のルールを知って謡わねば両者調和しない。囃子の方からみた謡なり仕舞は、その位取り、運び、曲趣の解釈に大いに参考になるが、現実面として謡の先生がそこまで踏み込んで教えてくれる例は少ない。具体的に大ノリ・中ノリ・平ノリの差、謡本にあるトル・オクリ・一地などの意味、または「く」や「一」。ヤ、ヤア、ヤヲ、ヤヲハなどをどの程度引くかなどなどを知れば単に節の符号を理解するだけより遥かに興味を増してくるであろう。小生は前述の通り良き師・先輩に恵まれたが、

それは入口を教えてもらっただけでその後は自分の勉強であった。それなりの努力をすればそれなりの効果なり成果が得られるはずであるから、たかが趣味とはいえ怠ることなくご自身の勉強をお勧めする次第である。具体的なことは囃子のベテランの諸先輩および小生でも、ご相談にのれるであろう。

地域ほかでの世話役

前述した地元四街道観謡会は結成25周年を迎えたが、このうち二十二年間は代表幹事として世話役を務めた。結成一年・十年・二十年目に『会報かんよう』一・二・三号を全員の寄稿を集めて発行、また十年・十五年・二十年目にそれぞれ国立能楽堂、千葉芸術文化センター、熱海MOA能楽堂において記念大会を行って皆様から大変喜ばれた。

またかつての陸士・陸幼出身者による同台謡曲同好会（観世・宝生・喜多）を約十年前に提唱・設立、その後代表世話人として九段にある偕行社で例会を行うほか、毎年有名能舞台（国立・杉並・MOA・久良岐等）で大会および靖国神社で春・秋、明治神宮、乃木神社（予定）で奉納大会も企画実行している。

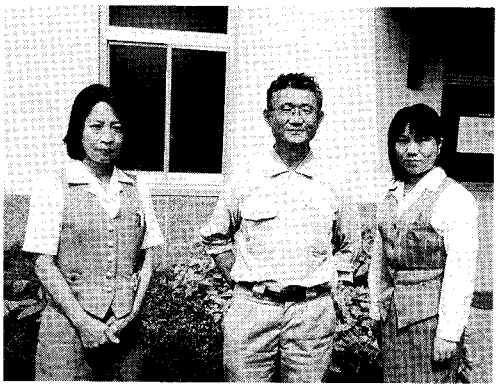
企業内の趣味グループにとどまらず、地域・同窓の同好グループのお世話役になって奮闘することもまた人生の快事であろうし、今後の人生設計にも組み入れられんことをお勧めする。

わが謡曲部 稽古風景

少数ながら楽しく

土浦工場謡曲部

現在メンバーは、女性三、男性二の計五名です。山田和子先生が荒川沖から工場まで、週一回、休むことなく来られます。生徒は休むことがあり、一～三人の時が多いのですが、楽しく練習しています。まず、私（**写真中央**）は先生がとても褒め上手なので、毎回良くなったと言われて、少しずつその気になって満足しています。趣味といえるようになってきました。



メンバーの自己紹介です。

原田博彰さん　元防府工場の謡曲部にお世話になっていた原田です。現在は、フードクリエーションセンターに勤務しています。八年振りに「桜川」ゆかりの地で、初心に帰って謡の心に触れてゆきたいと思っております。

坂本美枝子さん（写真右）　謡を始めて一年が経ちました。奥の深いものを感じています。何も知らず、突然メンバーが足りないからと謡のコピーを渡され始めました。山田先生の魅力に惹かれて練習しています。古典は想像の世界ですが、現実にも通じるところがあるように思います。でも難しくて先生から言われるようには、なかなかいきませんが頑張ります。

永長洋子さん（写真左）　謡曲部に入部して二年経ちましたが、途中間休部していましたので、実質一年です。何となく入った部ですが、「ストレス解消」に大変役立っており楽しく活動しています。大きな声をお腹の底から出す「腹式呼吸」は、健康にも大変良いので、さぼらずお稽古して、上手になりたいと思います。

あと、OBの**林一子さん**が練習に来られます。

なお、部員不足ですが、毎年秋に土浦の各流合同の会に参加しています。

（小林　誠）

第40回記念大会特集

うとう会40年と"私の謡曲"

熱っぽく、みんなで語った懇親会

このたびの記念誌も会員みんなで作りたいと思います。今回が第40回だからというわけでもないと思いますが、参加者が四十人台になってしまいました。ひと頃は百人に迫ろうかということもありました。時代の流れといえるのかもしれませんが、一方には協和うとう会を盛り上げていきたいという強い気持ちがあります。この記念大会を〝水原舞台〟(大和六瓢能舞台)で開いたのも、みんなでその決意を新たにしようという意味もあります。

この企画は参加者全員に、うとう会四十年の歴史の中で「私の謡曲」を楽しくお話しいただこうというものです。(司会者あいさつから。名前の次は現在の所属グループ名)

うとう会の継承者として

司会(安嶋将・本社)　まず、四日市グループの幹事役として、長い間、会場探しから当日の設営などのお世話役を務めていただいた山家さんに口火を切っていただきましょう。

山家多喜男(四日市)　昨年の秋ごろからヒゲを生やしました。そしたら乃木大将だとか、お褒めの言葉をいただいていたのですが、今年になってヒゲを生やした外務省の役人が悪いことをして逮捕されたり、テレビにタリバンのヒゲが頻繁に映るようになってから、ちょっとまずいことになりました(笑い)。

さて、富岡啓太郎さんが四日市工場におられたころ、私は四日市グループの事務担当として協和うとう会の番組編成など事務方の仕事をやりました。この仕事はその後磯部武夫さんと大阪グループに移って現在に至っています。協和うとう会の創設に携わった諸先輩は、みなさん七十歳以上の高齢になられました。お元気で百歳までもやられるかと思いますが、教えていただきながらこの方たちの後を次の世代が引き継いでいかなければならないと考えています。

協和うとう会は続けることに意義があると思います。自分も含めて中堅が次代を引き継ぐために頑張らなくてはなりません。

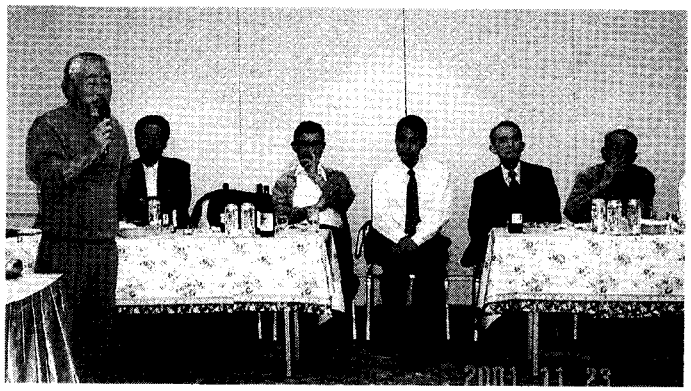
私は昨年の七月頃から二十年振りに鼓を再開しました。明日は「序の舞」を富岡さんの笛を聞いて落ち着いて打ちたいと思います。

司会　以前に懇親会の司会を何回かお願いして、盛り上げていただいたことのある鍛治さんお願いします。

今は続けることを…

鍛治義延(本社)　久しぶりのうとう会です。私は17回あたりからの参加だと思いますが、途中で転勤などがあってできない時期がありました。水原先生がお亡くなりになって、森泰城さんも亡くなられて、東京研究所グループの宝生流は空中分解した形になってしまいま

した。昨年の富士工場での全宝生流の会に出席し、関東地区の交謡会にも出ました。謡曲はなんとか続けたいという気持ちは持っています。月に二回一時間ぐらい先生について続けています。そのうちに時間がとれるようになったら他のことも



左から山家・水滝・小林・八尾・中村・磯部さん

やってみたいと思いますが、今は続けることを考えています。明日は大トリの「富士太鼓」のシテをやりますが、今日の全観世流「求塚（もとめづか）」のように謡えたらいいな、と思っています。協和うとう会の存続のためには、私なりに何か協力していきたいと思います。

おじさんたちと楽しく

渡辺尚子（本社）　私が本社謡曲部に入ったのは二十何年前で、期間は長い方ですが、うとう会への参加は少なく楽しみながらそこそこにやっているという感じです。同期には野村忠亮さん、川村實さんらがおられます。今本社の稽古は月二回ですが、雰囲気はすごくいいんです。おじさんたちと楽しくやっていて、稽古後には〝反省会〟と称する楽しい会におばさんも時には付き合っています。私は今年の三月に退職しましたが、熱心に稽古に出るようになりました。今度若い方が二人仲間入りされましたが、OBや出向者が本社所属の社員より多くなったため、協力会の補助が少なくなりちょっと困っています。小野葉満子先生は八十二歳ですが、頑張って稽古日にはちゃんと来ていただいています。

今年の交謡会で富岡さんに「うまくなったね」と言われた時はうれしかったですね（笑い）。前から富岡さんの謡い方が好きで尊敬していましたので、すごくうれしくなりました。もう一頑張りしようと思っています。

司会　次は、富岡さんがよろしいかも知れませんが、すでに耳打ちしてある方がおられます。今日の第一日では地頭ありワキありで大奮闘された浅井さんです。

月四回の稽古日

浅井昇（四日市）　今日は新井純先生に会えることを楽しみにしてきたのですが、ご都合で欠席になり残念でした。私は防府工場時代に昭和二十四年から新井先生に教わって謡を始めました。その後四日市工場に転勤しても続け、退職した今は四日市の土曜会でやっています。毎週土曜日で月四回、多い時は二十人くらい、少ない時でも七、八人で、その場で役を決めて謡っています。私は幹事三人のうちの一人を仰せつかっていて、役を決めるのに苦労しています。これまで地頭は古い方がやっていたのですが、改革をしようということで、新しい人もやることにしました。

この記念大会を水原さんの六瓢舞台で開いたことを、うれしく思います。

故木谷さんの紋付で

司会　うとう会の〝若手、若手〟と思っていましたら、今日は着物姿で「通盛（みちもり）」のツレを謡った〝立派な中堅〟の山野さんです。

山野順三（四日市）　いつもうとう会は付け焼刃の稽古で出るという情けない有様ですが、今回は感慨深いことが二つ

あります。一つは、私が初めてうとう会に参加したのは、今回と同じ六瓢舞台でした。「鶴亀」の連吟をやりました。その時より少しは進歩したかな、と思いますが何しろ付け焼刃ですから……。それから珍しく紋付の着物で謡いましたが、これは亡くなられた木谷正敦さんのものを奥様から貸していただいたのです。偶然に私の家紋と木谷さんの紋が同じだったのです。体つきが木谷さんと違うのですが、(「わからない、わからない」の声)感慨深いものがあります。うとう会には、付け焼刃でも細く長く参加していきたいと思います。

もう八十代になって

磯部武夫(大阪)　ちなみにうとう会第1回に出席された方、手を挙げてみてください……さすが少ないですね。皆さん年をとってしまい八十代になりました(笑い)。うとう会を始めるきっかけは、高橋さん、水原さんと私が労働組合の会合で一緒になって、その夜謡を謡ったのです。そして「各事業場で謡曲をやっている人はみんな集まろう」ということになり、防府工場では新井さんが頑張っておられました。ちょうど協和発酵が熱海荘を買った時でしたので、そこで第1回を開いたのです。その後のことは、これまでの記念誌のとおりです。同じ場所で続けてやったことはありません。初期は宝生流が勢力をもっていましたが、その後観世流がだんだん多くなって、逆転してしまい今日に至っています。

来年のことですが、平尾學さんが大津市営の能舞台を探してくれました。その隣に宿泊施設があるのです。ところが、ご本人は体調を崩してしまい、体にペースメーカーを入れる手術を受けました。十月、十一月は謡曲の会が多い季節で、日程調整の問題が避けられません。九月は台風が多い……。早めに日程を決めて会場を確保してください。うとう会は長く続いてきましたが、OBの顔ばかりのようになってしまいました。新しい人を引っ張ってくるようにしましょう。

Eメールでパイプ役

山田義之(堺)　うとう会は磯部さんが番組をつくって、私が田辺博章幹事とのEメールでのパイプ役を務めています。番組の編成は磯部さんまかせですが、会のお役に立てば……と考えてやっています。私自身も網代荘でのうとう会に初めて参加してから、キャリアだけは長くなりました。趣味が多くてあれこれやっていますが、謡の方は熱心な生徒です。こんな細い身体ですが健康にも良いことなので今後も長く続けていきたいと思います。皆さんは声も立派に鍛えておられる。堺工場グループも新人を入れるよう努力したいと思います。

脳梗塞を乗り越えて

大橋良作(富士)　平成九年のサンヒルズ三河湾でのうとう会の帰路、豊川稲荷にお参りしました。その年の暮れに胆石を取り通院することになりま

右から高橋・大森・藤田・浅井・綱野さん

した。翌年の二月に気分が悪くなり吐きました。血圧は二百十以上でこの時脳梗塞になったものと思います。思いますというのはこのあたりから過ぎたことを思い出せなくなったからです。うとう会も二回休み、毎日寝て暮らしました。することがないので『法華経』上・中・下巻を買い、四～五回ほど訳のわからないまま暇に任せて見ていました。日記をつけていたので二年過ぎたのが判りました。降圧剤のお陰で体も普通になり、うとう会に出ようとしたところ、膝が曲がらず正座ができなくなっていました。整形外科では異常なしの診断なのでマッサージと電気で通院することにしたのですが、同じような老人が一杯で皆二～三年通っていると聞いて、払の膝も簡単には治らないと思い治療を諦めました。椅子の生活で不自由ないから、謡の時も椅子を使えば良いと考えました。今まで脳梗塞の人を見ていて目がトロンとしていて気持ち悪かったのですが、自分がなってみるとそんなことはないと思うようになりました。

左から中里・藤井・但見・富田・薮下・山野・渡辺さん

後継者づくり実現

薮下尚夫（本社）　私が謡曲を始めました動機は不純なものでして、昭和五十七年に大阪の関係会社に出向しました折に、大阪支社に顔を出す口実にするため、謡曲部に入れていただきました。磯部先生に毎週お稽古をつけていただき、その年の第20回うとう会に「土蜘蛛」のトモで出させていただきました。多くの事業場から多くの参加者があったので驚いたことを覚えています。しばらくして本社に転勤しましたが、その後も時々休みながらではありますが、今回まで続けることができました。なかなか若い参加者が増えないということでしたので、これまで手当たり次第に勧誘して回りました。今回幸い二人の大型新人に参加していただくことができましたので、大変うれしく思っています。来年二月に定年で退職しますが、今後も引き続き参加したいと思っていますのでよろしくお願いします。

ゴマに大きな意味あり

大森大陸（本社）　私は本社謡曲部所属ではありますが、土浦近くに住んでいる関係で、ピンチヒッターとして時折土浦謡曲部行事に参加しています。その折に習ったことを一つご紹介しますと、謡曲本のコトバの右のゴマ点には右下がりの点と水平の点とがありますね。これまで両者を区別せずに謡っていましたが、右下がりゴマ点のところできまって注意を受けました。お師匠さまは「声を引け」とおっしゃるのですが、その意味がよく分かりませんでした。後で富岡啓太郎先生からお聞きしたところではこれを「引声」というそうです。ところで、中国語の発声には有気音と無気音とがあり、右下がりゴマ点にこの無気音を応用したところ、はじめてOKが出ました。このように謡曲本に付いている符牒にはそれぞれ意味

があり、これらを正確に発声するとより深みのある謡曲になると思われます。しかしあまり気にしすぎると〝邯鄲之歩〟のように、ついには謡えなくなりますので、ほどほどに注意したいと思いますね。これからも細く長く謡曲を続けたいと念願しています。

頭のリフレッシュ

矢尾幸三（富士） これまで部長でした森田さんが本社に転勤されたため、今期から私が部長となりました。高橋先生による週に一度のお稽古は、途中ブランクもありましたが早いもので延べ十年になりました。しかし、期間の割に一向に上達しない不良部員です。このお稽古の時間は、仕事や煩わしい日常を忘れて、頭を真っ白にできる私にとって貴重な時間になってきました。これからも、細く長くをモットーに、続けていこうと思っております。宜しくお願いいたします。

声の出る限り…

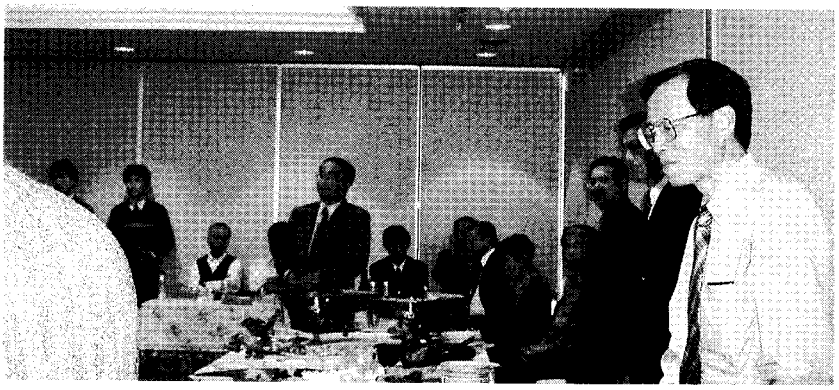
加藤恵理（富士） 能舞台での発表会というのに、まだまだお稽古不足できました。昨日は富士工場の文化祭でした。音楽同好会のコンサートを少しのつもりが、お終いまで聞いてしまいました。この曲が今日の出番直前まで頭の中をぐるぐる駆け巡っていましたが、舞台にあがると不思議と消えてしまいました。うとう会四十周年が私にとっては五周年記念でもあり、初めての能舞台での発表になりました。もう一つの私の記念は、初めての着物に袴姿で謡うことができました。しかも、故水原先生の袴を奥様からお借りしたもので、とても恐れ多いことでした。でも、今までの私の謡で今日が一番良かったように思います。何ともいえない幻想的な静けさの中で、「胡蝶」の謡が舞台の隅々まで覆っていたような気がしました。今年、私は不惑を迎えます。何事も惑わされずに、一心に声の出る限り謡を続けてまいりたいと思います。

懇親会も参加目的

八尾和廣（本社） 謡は五十三年本社謡曲部入部から始まり、うとう会へは多賀大社の第21回から参加しました。第33回の病気欠席のほかは毎回参加しています。うとう会で皆さんにお会いするのを楽しみに、また懇親会の和やかな酒席も参加目的の一つです。板橋区の医薬東京物流センターから月二回通う本社での稽古は欠席しがちですが、これからも長く続けたいと思います。

うれしい再会も

加藤弥生子（堺） 今年は、防府・宇部・門司からの参加は私一人という寂しいことになりましたが、四十周年という記念すべき会ですので、早起きして勇んで参りました。今回は東京のご夫人方に二十年ぶりでお目にかかれるとのことで、楽しみにしてきました。水原圭子さん、木谷芙美枝さんの優雅な舞を久し振りに拝見できるのもうれしいことです。四半世紀前に防府で始めた謡曲は、近くに所属するグループがありませんが、現在も楽しくお稽古した



右から田辺・田村・松本・瀬島・渡辺・北河・薮下・富田・山野・藤井・中里・矢尾さん

り、鼓も教えていただいて、さらに面白くなって参りました

左から森田・加藤恵理・木谷・加藤弥生子・三池・大橋・矢尾さん

このごろです。

能を始めて五年

森田英基（本社） 今年でうとう会出席が三回目となります。能を始めてからは五年になります。途中一時期中断していたこともあるのですが、こうしてなんとか続けていられるところをみると、「よほど縁があるのかなあ」と思います。継続は力なりと申しますが、私の場合は断続でして、年数ほどに上達しているか、といわれると心もとない気がします。あまり無理をしすぎると続かなくなるというのがモットーですので、このような形ででもマイペースでエッチラ、オッチラ定年後の趣味を準備しているつもりでやっていきたいと思っております。

面打ちはご無沙汰

上森　茂（四日市） 本日40回記念大会に「通盛」のシテを謡う幸せをいただきました。途中若干うろたえてしまうところもありましたが、水原先生が工夫を重ねられた六瓢能舞台の最高の環境の中、気持ち良く謡うことが出来ました。これまでのお話しの中でもたびたび出てくる、第21回多賀大社（滋賀県）が私のうとう会初参加となり、それ以来おかげさまで毎回出席で今回の記念大会となりました。さて、四日市工場グループで、すべてをお世話いただいていた山家さんが定年を迎えられ、その後を受けて会場探しなどぼつぼつ引き継ごうと考えています。また、新人獲得、特に女性の獲得については皆様もご承知のとおりであります。これは引き継ごうとしても真似はなかなか出来ません。私も見よう見真似で打った面がご縁で謡曲部へ、そしてうとう会にお世話になることとなりました。その面打ちはずい分ご無沙汰中で、まだ角がない般若と小面が箱の中に眠っています。うとう会のお世話の方は、存在が大きい山家さんにいろいろ教えていただきながら、少しずつ引き継げるものは引き継ごうと考えていますのでよろしくお願いいたします。

今回はホテルのお世話を

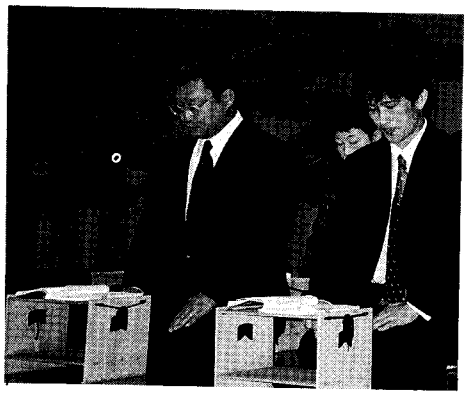
松本正（元東研） 私の謡は最初からずーっと水原先生に習ってきたものですから、他の先生には習いたくないという気持ちもあって、水原先生が亡くなられてから中断しています。水原舞台が出来てここで最初にうとう会を開いた時は、私が東京研究所でお世話役をしました。宿泊は相模原の方でしていただきました。今回は謡の方では何もできませんでしたが、このホテルのお世話をさせていただきました。ホテルのすぐ近くにダンススクールがありまして、今私はそこでダンスを習っています（「浮気しているのか」笑い）。今度の日曜日に一番やさしい六級のテストを受けることにしています。かつて水原先生が「謡、仕舞、ダンスは共通点があるから…」とご自身もダンスをやられたこ

とがあるとお聞きしました。実際やっていて姿勢などを考えると似たところを感じます。謡はまたやりたい気持ちはありますが今のところ踏ん切りがつきません。いつかまた習い始めましたら、その時にはよろしくお願いします。

大型新人と言われても…

司会　先ほど薮下さんが本社の〝大型新人〟と紹介されたうちの一人…。

北河康之（本社）　この歳になって大型新人といわれるとどうも…。私はこのうとう会はすばらしいと思います。私、本社の釣部にも入っていますが、高齢化が進んでおり現役社員はほとんどいません。懇親会もなくて、全国から集まってこのように和やかな雰囲気のうとう会はうらやましいと思います。釣部とうとう会の違いは、歳をとると自分では何もできなくなって、「エサをつけてくれ」「魚を外してくれ」というのが釣部の状態です。皆さんの謡を聞いていますと年配の方の声は若い人と全然違うのですね。感銘を受けました。私はフルートをやっていますので笛にも興味があり、今日の西村さんの笛は参考になりました。今度一緒に始めた富田君と末永く続けたいと思います。



初舞台で「鶴亀」を謡う北河さん（左）と富田さん

体重減らして謡一生

水滝彰一（堺）　うとう会は第19回から参加しています。春の中謡会（四日市・堺・大阪のグループによる「協和うとう会中部版」）と秋のうとう会の二つの会に参加して二十年続けてきました。たぶん一生続けていくだろうと思っていますが、今回、地謡を三番やったら足が痛くなって続けるのが不安になりました（笑い）。この辛さは言葉には表せません。謡を続けるには体重を減らす必要があり、歩く運動などもやって謡を一生続けられるようにしたいと思います。

ご主人の分も…

司会　協和うとう会の長年のメンバーで先年亡くなられたご主人の分も含めて、奥様の木谷芙美枝さんにお願いします。

木谷芙美枝（四日市）　今日は久しぶりに皆さんにお会いできて、うれしゅうございました。防府での三十周年記念大会からこの十年間に、私には最高に楽しいこと、悲しいこと、いろいろ重なりましてうとう会の参加をしばらく中断していましたが、この春の中謡会にお誘いを受けて復帰しました。そして謡は良いものだと実感しています。主人は最後の入院になる時に、前の日の新年会で「老松」のシテを謡いまして、お酒もいただいてとても楽しい思いをして帰ってきました。私も最後まで謡曲を楽しみたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

司会　私の木谷正敦さんの思い出の一つですが、いつかのうとう会で奥様と〝伊勢の丸いも〟のことをお話したことがありました。次の年にうとう会へ向かう電車を乗り換えた時に、バッタリご主人と一緒になりました。座席に並んで座ったら木谷さんが「これ家内から…」とおっしゃって新聞紙に包んだ〝伊勢の丸いも〟をくださったのです。

最初の親子参加

司会　うとう会の歴史の中で、いろいろ話題がありました。ご夫婦での参加はかなり前からありましたが、親子で参加されるのは非常に珍しいケース

でした。最初の親子参加の子供さんで、結婚されて三池姓から高田姓になった曜子さんお願いします。

高田曜子（富士）　ミレニアムブームに乗って爆弾発言の結婚をしてからちょうど一年経ちました。電車通勤で片道一時間かかっていますが、これが私の勉強の時間です。特にうとう会や宝生会の前には、一生懸命勉強しています。このような身体ですので、西村先生から「ソバだけを食べていなさい」といわれました（笑い）。この身体のせいもあるかとも思いますが、周りから「もう子供ができているんじゃないの？」といわれています。実はまだなんですが、そろそろ少子化が進む日本のためにも、こちらの方も頑張ってみようかと思っています。そしたら、うとう会を休むことになるかも知れませんが、日本の将来のためですから、よろしくお願いします。

司会　日本のため、うとう会のために立派なお母さんになってください。

明石大橋の下で鍛える

瀬島常雄（大阪）　昭和三十一年に防府工場に入社しまして、工場の文化活動が華やかな時代でした。寮で隣の先輩が尺八の先生で、向かいの棟には謡曲の先生の森脇さんがおられました。両方から誘われましたが、九千八百円の初任給ではとても尺八が買えません。謡本は確か百五十円くらいで買えましたし、森脇先生が私の郷里と同じ島根県出身ということもあって謡曲部に入りました。私六十四歳になったばかりですが、二十四歳から始めました。当時の防府工場には謡曲をやられる方がたくさんおられました。KH肥料が開発されて、私は技術担当として営業へ出て九州の担当になりました。九州支社には謡曲部がありませんので謡は諦めていました。その後大阪へ転勤になり、磯部先生が謡を教えにきておられたので即入りました。三年ほどして本社に転勤になりましたが、ほとんど稽古に出れませんでした。大阪に戻り、また磯部先生につきました。その後また防府工場に戻りましたが定年を迎えて、今神戸の舞子という所に住んでいます。そこで贅沢な練習をしています。明石大橋の下で、いくら大きな声を出しても迷惑になりません。磯部先生には「テープを聞くだけではダメで、大きな声を出して謡え」と鍛えられています。

陶芸にも入れ込んで

司会　先ほど少子化の日本のために子づくりに励みたい、という高田曜子さんのお母さん、つまり日本のお母さんである三池公恵さん、お願いします。

三池公恵（富士）　高橋先生に月二回ほど鼓を教えていただいていますが、ここ十年ほど謡よりも陶芸の方にすごく熱が入っています。うとう会はいつも十一月ですが芸術の秋ということでいつも九・十・十一月は美術展が三つばかり立て込んでいて、焼いている間に謡を一生懸命覚えているのですが、ここへくるのが申し訳ないという気持ちです。今年から静岡県の工芸作家協会に推挙されて入ることができましたので、そこへの作品を十二月の初

三池公恵さん（左）と高田曜子さんの親子共演

めに出さなければなりません。大きな作品を仕上げると時間がかかり、重いので体力も必要ですから若い今のうちしかできないという気持ちがあります。謡は一生できますが、体力の要る焼き物はあと二、三年できるかなーと思っています。力仕事の体力がなくなったらまた謡を一生懸命やりますので、よろしくお願いいたします（笑い）。

大ノリを外すな

高橋孝夫（富士）　六瓢舞台とはどんな舞台か…。水原一瓢さんが六瓢舞台の舞台披きで能「猩々」を舞い、私はその地を謡いました。その折、伺ったのですが「六瓢舞台はみんなの舞台だ」と。これが一瓢先生の六瓢舞台なんです。

先ほどの磯部さんのお話につながるのですが、箱根で磯部さん、水原さんと私が一緒になって、私が二人の前で初めて謡を謡いました。「鶴亀」の「月宮殿」でした。そしたら、私の謡では太鼓はおろか鼓も打てないといわれ、散々に恥をかきました。私は当時、宝生流嘱託の青山先生に習っており、熱心な生徒でしたので先生から褒められたこともあったのです。それが二人からダメだといわれ、「三島には蛭見先生という良い先生がおられるではないか。一から勉強しなさい」といわれたのです。それから蛭見先生についたわけです。その当時富岡さんが大鼓をすでに蛭見先生に習っておられ、二人は毎週雨の日も自転車で通いました。それで拍子の謡を会得しました。

素謡では大ノリでも外してはいけない、中ノリはもちろんと強くいわれた。ところが、これがなかなか困難です。一朝一夕にはうまくいきません。私は鼓を打つよりも謡を謡う方がむずかしいと思います。したがって、これからは謡を主に研究していきたいと思います。私が教えている人たちは特に大ノリを外さないで謡ってほしい、と申し上げます。

司会　いやいやこれは大変なことになりました。大ノリに加え明朝は小田急に乗って六瓢舞台へ向かってください。

謡曲十五徳

不行知名所　行かずして名所を知る
在旅得知音　旅にありて知音を得る
不習識歌道　習はずして歌道を識る
不詠望花月　詠めずして花月を望む
無友慰閑居　友なくして閑居を慰む
無薬散欝気　薬なくして欝気を散ず
不思昇堂上＊　思わずして堂上に昇る
不望交高位　望まずして高位と交わる
不老知古事　老いずして古事を知る
不恋懐美人　恋せずして美人を懐う
不馴近武芸＊　馴れずして武芸に近づく
不軍識戦場＊　軍せずして戦場を識る
不祈得神徳＊　祈らずして神徳を得る
不触知仏道　触れずして仏道を知る
不厳嗜形美＊　厳ならずして形美を嗜む

＊印のないものを「謡曲十徳」と呼んでいる。

役の人物を研究して

藤田良輔（本社）　本社で稽古しているOBです。うとう会初参加は館山寺の時でした。それからダラダラとやってきていまして、月二回の稽古日には夕方の五時ごろ自宅から駅まで自転車を駆って、自分ながら物好きだなーと思っています。ラフな格好ですので大手町に着くとキチンとしたサラリーマンばかりで、場違いな感じがして「こんな服装ではまずいかなー」と思うこともあります。謡はもううまくならないと思いますが、稽古が終わってビル地下街の「せとうち」で仲間と一杯やるのが楽しいのです。うとう会のために役が決まると「これはどんな人物か」を調べて、それに沿って謡うようにしています。今日の役はワキでしたので、橋懸かりから出てきて「名ノリ」をするところをイメージしながら謡いだしました。うまくなれなくても、役の人物に合ったように謡うようにしたいと思っています。今回は40回ですが50回にもぜひ出たいと思いますが、私は七十八歳になります。親父が八十まで生きましたので大丈夫だろうと思います。

左から藤田・大森・高橋・富岡・西村さん

水原さんのテープで稽古

高山健一郎（富士）　水原さんとは長いお付き合いなのでしゃべりたいことは一杯ありますが、時間の都合もあるようですのでグッと省略して、あとは記念誌に書かせていただきたいと思います。本日は「東北」の独吟を無本で十何年振りかでやりました。これは六瓢舞台の「六瓢会」で謡って以来でした。89年のことでしたが私は協和発酵を辞めて一年目の年で、水原さんからテープをいただいて稽古しました。今回もそのテープで稽古をしっかりしたつもりでしたが、舞台で声が震えているのが自分でもわかりました。会社を辞めた後は高橋さんや平尾さんに声をかけていただき、うとう会に参加してきました。細く長く、継続が力だと信じてやっていきたいと思っています。

仕事優先で頑張れ

西村淳（本社）　今年は私が学校を卒業して協和発酵に入ってから、ちょうど五十年になります。その意味で卒業五十周年の記念旅行が四あさってからあるものですから、今回は一日目だけの参加になりました。五十年前に富岡さんと一緒に富士工場に配属になって行った頃は、まだ謡曲部はありませんでした。三島の橋本医院という所に謡の玄人の先生が教えに来ておられましたので、二人ともすでにやっていた謡に加えて仕舞も習いに行きました。二十七年に防府工場でストマイを造ることになり、二人とも転勤になりました。防府工場は謡が非常に盛んなところで、今日参加されるはずだった新井純さんが技術部長・工作課長をしておられて、浅井昇さんらに加わって謡を習いました。さらに、右田の方に町田さんという先生がおられましたので習いに行き「地拍子」を教わりまし

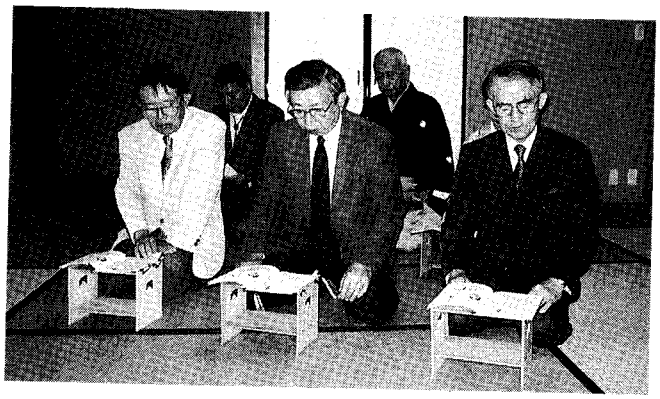
た。後は自分たちで本を買って独習しました。防府時代に片山先生という先生に新井さんと富岡さんは大鼓を習い、私は小鼓を習いました。このような若い時のことが基礎になっていると思います。仕事に一生懸命になってうとう会を休んだのは十数年になると思いますが、二十数年前に脊髄カリエスを患って一年間入院しました。これで思い知って、ゴルフなんかよりも謡が良いと考えました。月に一回寮歌を歌う会に参加し、月に一回軍歌を歌う会に参加し、月に四、五回謡曲をやっていますが、いろんなものを比較すると謡曲が一番よろしい。他のものに浮気してもよろしいが、最終的には謡曲に帰れば良い。謡曲の基礎があってはじめて囃子なども成り立つものです。私は笛を六十二歳から一噌市松先生に習いました。金春流の太鼓は六十五歳からです。亡くなられた人間国宝の瀬尾先生に大鼓を習いました。他

わが謡曲部
稽古風景

先生の合いの手で
稽古に達成感

富士工場謡曲部

富士工場謡曲部は、工場内の水明荘にて月二回、お稽古を行っております。高橋孝夫先生には、小田急とJRを乗り継いで、秦野から富士工場までご足労頂いており、部員一同、心から感謝しております。先生からは、宝生の謡の楽しさ、面白さを教えていただいております。節の間に「そう、そう…」と先生から温かい合の手を頂くと、つい気持ち良く謡に没頭してしまいます。一曲を謡い終わったときの達成感で、お稽古後に頂くお茶が何倍にも美味くなります。また、先生には謡に加えて小鼓を丁寧に教えていただいております。最近小鼓人口が増え、筆者以外の全ての部員が小鼓の稽古するという繁盛ぶりです。小鼓の「ポン、ポン」という清んだ音は、お稽古に独特の雰囲気と活気を与えております。発表会については、春の交謡会、秋の富士工場文化祭、うとう会に加え、平成十一年から協和宝生会を毎年一回、春に開催しております。



前列右から中村・岡田・高山さん。後列は高橋(右)・大橋さん

平成十四年度も五月二十六日に富士工場水明荘にて行われ、日頃の稽古の成果を発表いたしました。顔なじみが集う会ですので、うとう会とは異なりアットホームな雰囲気ですが、このような会で場数を踏むことは、部員にとっては貴重な機会であります。富士宝生の伝統的会にすべく、継続していきたいと思っております。

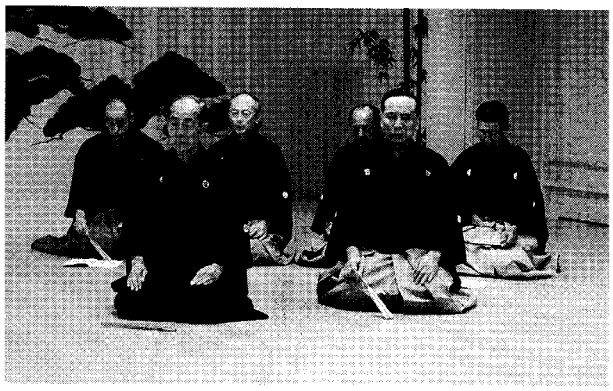
近年、退職や転勤に伴い富士宝生から貴重な人材が流出し、若干淋しいお稽古風景になっております。和泉元彌らが芸能ニュースを賑やかしております昨今、今まで能など知らなかった方々にも日本の伝統芸能が認知されてまいりました。ぜひ、来年こそは新人を富士宝生に勧誘し、うとう会に華々しいデビューをさせたいと思います。ご期待ください。

(矢尾幸三)

に鼓も習いに行きましたが、忙し過ぎてやめました。笛もある程度のものは習いましたので、今は太鼓だけに行っています。

先ほど大ノリのお話がありましたが、地拍子謡と囃子謡は違います。囃子謡は囃子を聞きながらそれに合わせて謡わなければなりません。地拍子は機械的に三四五六七八という具合です。これが基礎になって囃子謡いができるようになります。囃子に太鼓が入る場合、太鼓が主導権を持ちますので、これを聞かなければなりません。太鼓が入らない場合は大鼓（おおつづみ）が主導権を持ちますので、これを聞き分けなければなりません。囃子をやらなくても耳を澄ませていたならば自然に聞けるようになると思います。

仕事に忙しいときは、謡曲に一生懸命になる必要はありません。仕事で食べているわけですからこちらで一生懸命やるべきです。ただし、いつかはヒマになります。その時には謡曲をやりなさい。では、オーストラリア、ニュージーランドの旅に行ってきます（笑い）。



第28回（平成元年・六瓢能舞台）の一番目に「神歌」を謡う。左から齊藤・新井・富岡・磯部・西村・浅井さん

謡曲は一生できる

藤井武夫（堺）　昨日、今は亡き木谷さんの紋付・袴で舞台に上がったという話がありました。私は三十数年前に安嶋さんが作ってくれた舞台用イスを持って参加しました。昭和四十年代の半ば頃から本社で磯部さんにご指導を受けました。その後九州に転勤して空白がありました。大阪に帰って再開し、定年になっても続けています。私はダボハゼみたいに、畑を作ったり毎週日曜日はサッカーをやったりでいろいろやっています。サッカーは歳とともに引退する時が来ると思いますが、謡は一生できるので磯部先生について出来る限り続けたいと思います。

憧れのうとう会に…

中村佶郎（本社）　私はこのうとう会には長年憧れを持っていました。社内報のうとう会の記事を読んで、「協和のレベルは高いな…」と感心していました。なかなか敷居が高くて今日までご縁がありませんでした。今年の正月に突然チャンスがありまして、学生時代の仲間の一人で謡曲の教室吟松会を主催している横井徹さんから声がかかりました。彼のお母さんが宝生流の有名な先生でして、その教室を彼が新日鉄を退職してから継ぎ、森ビルの中に教室を開いて先生をしているのです。この方が学生能の仲間を集めて新年会をやりましたら、「皆ロートルになったけど、またやろうじゃないか」ということになり、月二回くらいのペースで熱心にやっています。全国学生連盟という学生能の組織がありまして、九月二十四日に千駄ヶ谷の練習舞台で学生能をやりましたが、出席者には学生の現役がいなくてOBばかりでした。このようなことがあってこのうとう会に参加することにもなりました。今回は中村寛之助さんにもお誘いしましたが、体調を崩してやっていないとのことでした。これから毎年できるだけ参加したいと思います。

将来への助走として

田村直邦（大阪）　私は九州支社から大阪支社に転勤した

時に、当時の総務課長にかなり強引に謡曲部に誘い込まれました。この頃確か『ノーと言えない日本人』という本が話題になっていました。ノーと言わなかったばかりに翌日総務課長が来て「千円」と言われ、何ですかと聞いたら「謡曲部の部費」と言われました。三年経って本社に転勤する時に、才能もないしテニスにしようかなと考えたのですが、本社の職場では安嶋さんが直属の上司で結局逃げられませんでした(笑い)。また大阪へ行ってやっていますが、練習も欠席勝ちです。しかし昨日の西村さんのお話のように、時間ができた時の助走ということで続けたいと思います。

同期入社四人の誓い

中里宜資(富士)　私が初めてのうとう会で舞台に上がったのもこの六瓢能舞台でした。次は薬師寺ですごく盛大でした。その時昭和六十三年入社の同期四人が集まって、前に座っておられた先生方を見て「三十年経ったら、オレたちもあそこに座るぞ……」と誓い合いました(笑い)。しかし仲間は減って続けているのは二人になってしまいました。高橋先生がうとう会に四十回参加しておられると聞いて、われわれ若い者は第80回にも参加できるんだ……と考えました。今後も続けていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

司会　やはり若い人の「今後も続けますので…」という決意表明は心強いですね。

いつも来年を期して

綱野政美(堺)　私が謡曲を始めたのは堺工場でしたが、途中六年ほど四日市工場に転勤していました。知らない人ばかりの四日市で謡曲部の方から声をかけていただいて、全国的な協和うとう会に入っていると転勤した時にこんな心強いところあるなーと思いました。昼休みにテープを聞きながら稽古したこともありました。また堺に戻りましたが、堺工場は手狭なもので大きな声を出すところもなく、仕事の忙しさもあって、いつも「来年こそうまくなって来よう」と思うのですが、また一年経つとまったく進歩していない自分がいるような状態です。時間がとれるようになったらしっかり稽古して、長く続けていきたいと思います。

初舞台の「鶴亀」

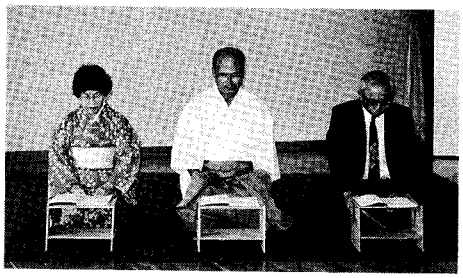
富田篤尚(本社)　私が言わせていただいてもよろしいのやっておられる謡仲間には岸田軍二・永富正人さんがおられます。うとう会で仕舞を舞った永岡重信さんは亡くなられました。

わが謡曲部 稽古風景

山口宇部でも ガンバッています

宇部工場謡曲部

現在宇部工場謡曲部の部員として稽古しているのは、花田有紀子・古谷正勝・西本徳之さんの三人です。かつて一緒にうとう会に参加して、今はよそで



写真上は、右から古谷・岸田・花田さん、下は右から古谷・西本さんと社外の謡仲間

でしょうか(笑い。「もちろん、もちろん」)。私は本社の医薬にいますが、北河さんに誘われて、一カ月ほど前から稽古を始めました。稽古も毎回出ているわけではありませんでしたので、直前は急ピッチで稽古しました。初舞台の「鶴亀」がうまくいきましたかどうか……。今後もやれる範囲で頑張りたいと思います。

左から渡辺・水滝・小林さん

地頭に聞き耳を立てて

富岡啓太郎(本社)　十月から十一月にかけて私の関係する謡曲の会が六回もあり、これが四回目で明日はまた横浜の能楽堂であるんです。この間河盛さんから関根先生の「安宅」の番囃子のテープを送ってもらって「勧進帳」をやろうと思っています。これは習っていないのですが、めくら蛇に怖じずで研究してやろうと思います。今年の棹尾(とうび)を飾る会としては西村淳さんがお世話している旧陸軍の会が明治神宮であり、弟が陸軍だったものでお付き合いします。

私は囃子とかいろいろやっていますが、一番面白いのは謡です。きのうの全観世「求塚」で磯部さんの地頭で気持ちよく謡わせていただきました。地謡は「地頭の声に聞き耳を立てて謡うこと」が大切だと思います。地頭が息を引いて謡うか、息を出して謡うかあるいはメラシて謡うか、耳を澄まして聞き耳を立てながら謡うと良いと思います。うまくハーモニーが得られるとえもいわれぬ醍醐味を感じますね。地頭の声が突出しているとあまり良くないと思います。声は大きくなければなりませんが、全体との調和がとれていてのことです。私は今、野村先生に謡を習っているんです。舞囃子や笛、大鼓(おおかわ)などいろいろやりますが、一番うまくなりたいのは謡です。

司会　昨夜ホテルの部屋が富岡さんと一緒で、今の「地頭の声に聞き耳を立てて謡う」という表現を伺ったのですが、四十回にして初めて聞く適切でうまい言い方のように思います。

田舎へ帰っても…

但見靖啓(本社)　私は現在、三桜商事に出向しています。文京区の会社から大手町の本社まで三十～四十分かけて稽古に行っています。気分転換にもなりますので、百%近く出るようにしています。うとう会の初舞台は館山寺(浜名湖)の時で、鈴木正直さんらと一緒でした。「紅葉狩」をやりました。その後、転勤があって十年間くらい空白があったりしましたが、今日まで続けることが出来ました。私は来年はOBになるものですから、その準備もしており秋には田舎に帰ろうと考えています。そこで謡の先生に巡り会えるかどうかわかりませんが、うとう会は足抜けできないとのことですので、できるだけ続けてうとう会にも参加したいと思います。

仕舞袴が眠っており…

田辺博章(本社)　今回の謡の方は穴があったら入りたい思いです。四年続けて独吟をやっていますが、無本もできていません。謡っている時にはもう舞い上がっている、という感じ

です。独吟の修業はいつになったら自分の気に入るところにいけるのかなーと思っています。地謡を磯部さんと浅井さんの隣で、富岡さんのおっしゃられたように「聞き耳」を立てながら謡えて、舞台の音響効果もあって、よい気分でやれました。以前には富岡さんに仕舞を習ったのですが、その後「お終い」になってしまいまして……（笑い）、仕舞袴も持っておりますので、またやりたいと思っています。

防府時代からのお仲間と

司会　今回の記念大会は水原舞台で…ということもありましたので、それならば在京のご夫人グループにもぜひご参加を、とお願いしご協力をいただきました。

守弘薫子（在京）　私は交謡会にはよく出ているのですが、うとう会は水原さんがお元気なころ以来の久し振りの参加になります。今日ちょっと早く参りましたのは、私の娘時代の

わが謡曲部 稽古風景

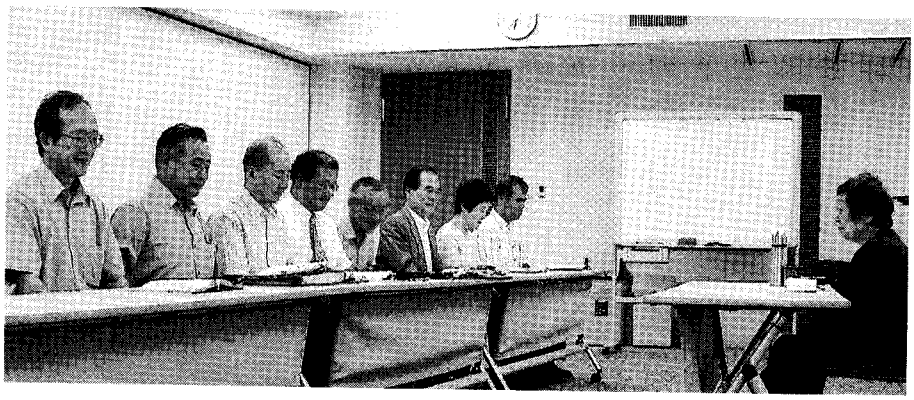
現役社員の部員二人 稽古で英会話妨害？

本社謡曲部

本社謡曲部は名誉部員？一人を含めて十二人です。

稽古は引き続き小野葉満子先生にご指導いただき、月二回、火曜日に五階第4会議室をホームグランドに活動しています。ちなみにお稽古と同じ日には隣の会議室で書道部と英会話をやっており、特に英会話のみなさんにとって謡曲はうるさいらしく、ほとんど授業にならないそうです。そんな人の迷惑ものともせず、本社謡曲部は日々お稽古に励んでおります。

この一～二年というもの薮下・但見さんと会社卒業者が続出し、現役はめっきり減ってしまいました。特に本社勤めの現役は富田君、北河のたった二人です。その富田君も期限付きとはいえ英会話組に入っており寂しい限り、早々に戻ってくれることを切望しています。



一方、小野先生にはご高齢にもかかわらず本郷のお宅から地下鉄利用で毎回おいでいただいており、その気迫と声量には圧倒されます。

現在、現役部員の勧誘に奔走する毎日ですが、最近の社員はクラブ活動に対する関心がまったくありません。

協和うとう会で「本社グループ」になりますと、大先輩の新井純・富岡啓太郎・西村淳さんが加わります。

写真はある日の稽古風景　右から小野先生・但見・渡辺・野村・安嶋・北河・藤田・大森・薮下さん。これに八尾・松井・富田・神田さんが加わって全員になります。

（北河康之）

師である新井さんの独吟「砧」を聞かせていただこうと思ったからですが、ご欠席で残念でした。私の習い始めは古いのですが、間がずーっと空いていて最近になってまた先生について稽古をするようになりました。ちょっと系統が違いますので苦労しています。この会は防府時代のお連ればかりですから、昔のように服部さんの地頭で大変楽しく謡わせていただきました。

舞囃子「紅葉狩」の水原さん

ただのお婆さんはイヤ

天野美智子（在京）　遠い埼玉から参りました。東北沢の交謡会にはよくお誘いをいただいてきましたが、遠い地方で開くうとう会には主婦だから出て来れないだろうとあまり声をかけていただけなかったのですが、お声がかかれば行きたいなーと思っていました（笑い）。私は六十歳を過ぎた時、これからも自信を持ってやれるものを一つ持ちたい、ただのお婆さんになりたくない、と考えてまたお謡を始めました。みんなで謡う稽古を月に二回、先生と対面で謡う稽古を月二回しています。なるべく続けますので、よろしくお願いいたします。

司会　これ幹事、来年のうとう会のご案内は洩れなきよう申し付けおくぞ（笑い）。

遺産を守ってもっと楽しく

司会　次は、当六瓢舞台の主（あるじ）である水原さんお願いします。

水原圭子（在京）　皆さんこのたびはありがとうございました。緊張をさせていただきまして……（笑い）。これは水原の遺産ですが、モノの遺産ではなモノの遺産ではなく謡を教えてキッカケを作ってくれたのが一番の遺産だと思います。今も歳とっていますが、もう少し歳をとるともっと楽々と楽しく謡えるようになりたいですね。この間七回忌をしましたが、私はようやく独り暮しに慣れてきました。先日、渋谷に新しくできたセルリアンタワーの能舞台で「海士（あま）」の舞囃子をやりました。そして今回は「紅葉狩」を舞うようにいわれたのですが、この舞台の「掃除のおばさん」も兼ねていて忙しいものですから稽古をする間がなくて心配でした。老いて醜くなるのが普通ですが、私は謡も仕舞も美しくなりたいと思っています。長命の家系ですから九十五歳まで生きると思っており、まだまだ先があります（笑い）。次は何をしようかというものがある方がうれしいと思います。ついでですが、その壁に掛かっている絵は私が描いたものでチェコへ行った時のものです。普段は働きすぎるほど働いて、一年に一度外国へスケッチ旅行をしています。このように大いに楽しんでいますので、ご安心ください。

能を観る楽しみ

岡田英明（富士）　アメリカで仕事をすることが多くて、例年ですとこの時期はアメリカですが、同時テロのために中止になり今年はここに参加でき

ました。鼓は私の師匠が亡くなって今は習っていません。最近は渋谷の観世能楽堂によく行きますが、観世流も宝生流も能としてみた場合に基本的にはあまり変わらないと思います。鼓は葛野流ですが同じ家元でも私が習った師匠と今の家元では打ち方がずいぶん違うな、と思って聞いています。もともと江戸時代は笛や鼓はアマチュアであったらしい。シテ方とワキ方がプロで、笛の森田流などはアマチュアの最たるものだったらしいのです。しかし、事あらばピシッとできたらしいですね。家元でも必ずしも同じように代々キチンと伝わっているものではないと感じています。今興味があるのは大鼓でして、前にプロも教わりに来ていた瀬尾先生に習ったことがありますので愛着がありますが、だいぶ脳が弱くなっていますので記憶力に自信がありませんけど、能を観るのを楽しみにしています。

声を出す楽しみ

松井信行（本社）　昨日は所用があって失礼しました。私は二十周年の時は大阪にいまして参加したものですから、今回もぜひ出たいと思い今年の春から本社の謡曲部に復帰をさせていただきました。自分から遠ざかっていたのを、また戻らせていただいた次第です。最初の謡曲部は昭和四十年代後半の本社でして、磯部先生から小野葉満子先生に交代される時期でしたが、このたび復帰したら同じ小野先生でした。すばらしい声のままでびっくりし、うれしく思いました。この七月からミヤコ化学に移ったものですから練習をサボりまくっていましたが、ここへ来るにはせめて一回くらい練習をと思って先日ようやく稽古に出ました。私は声を出すことが非常に好きです。皆さんの謡うのを聞いていますと、お歳に関係なくよく声が出ており感心しました。大きな声を出すのは健康の源だと思っています。長く続けたいと思っており、たとえ細くであっても続けたいと思います。

関根先生についてます

河盛迪子（在京）　このたびの参加について、薮下さんにはいろいろお世話になりました。安嶋さんから夫人グループが抜けているといわれて、急な参加でしたので曲目も急いで決めてみんなでやって来ました。先ほどの富岡さんが今年「融」の「酌之舞」をなさって、ぜひ観たかったのですが残念ながら他のことで行けませんでした。私は昨年「融」の舞囃子を関根先生の所でやらせていただき、今年は「藤戸」シテをやらせていただきました。ボチボチとやっていますが、ウチのグループは服部さんの地頭でないと成り立ちませんので、今後ともよろしくお願いいたします。

即席で不勉強ながら…

小池方子（在京）　先ほどから皆さんのお話を伺っていてとてもうらやましく感じています。将来に向かって希望をもって稽古していらっしゃいます。私は結婚後しばらくしてか

在京夫人グループの「巻絹」。前列左から河盛・天野・小池さん

ら社宅で仲間入りさせていただき、頭の天辺から出るような声から始めましたが、それ以後、東京に出てきてからは稽古は一切していません。お誘いをいただくと恥ずかしながら即席で出てくるような有様です。不勉強なものですが、よろしくお願いいたします。

連調「羽衣」左から大橋・中里・三池・高田・加藤さん

腹式呼吸で大声・健康

服部幸（在京）　これまで交謡会とうとう会には何回か参加させていただいていますが、今は他にやっていることが忙しくて謡の方はあまり熱心ではありません。でもこの声の大きいのは、みなさんから評価されています（笑い）。何かで返事をしたり号令を掛けたりした時に、「服部さんだ」と声の大きさだけで評価され、これも謡曲のお陰だと思っています。謡をやって腹式呼吸を身につけましたので、案外と健康で過ごさせていただいています。今日は昔の社宅仲間の奥様たちとお会いできるのが一番の楽しみでした。またいろんな方の謡の雰囲気を伺って、楽しゅうございました。今年の一月に主人が亡くしましたので、皆さんがひとしお懐かしく感じられます。ありがとうございました。

独鼓「玉葛」の高橋さん（左）と三池さん

司会　服部さんの謡は防府工場時代から存じ上げていますが、あの頃は高めの声で、今は格段の格の違いを感じました（服部「コーラスをやっていました」笑い）。控えの間で着物を畳んでいましたが、腹にビンビン響くような迫力でした。

お仲間が楽しくて…

加藤包子（在京）　私も防府工場時代に服部さんはじめ皆さんと稽古していましたので、東京へ出てきてからも服部さんに習っていたのですが、急に動いたりしましてずっと謡から遠ざかることになってしまいました。ただ皆さんとお会いできるのが楽しくて、声を掛けていただいたので参加させていただきました。またこの次もよろしくお願いいたします。

謡がご縁の永久会員

司会　ご協力ありがとうございました。これを原稿に起こして、皆さんの写真も入れて楽しい雰囲気を伝える記事にしたいと思います。

私のパソコンには、これまでのうとう会に参加されたことのある方のお名前が約二百六十人ほど入っています。この「会員名簿」には亡くなられた方のお名前もあります。四十年の間に一緒に謡曲を謡ったというご縁を大切にしたいと思うからです。

今は謡曲から離れている方もたくさんおられますが、かつてはうとう会のメンバーとして一緒に謡ったという記録を残したいと思います。

（文責　安嶋　将）